



【参加して】先輩たちから経験の壁を押し崩し、災害が起きた時にどう行動すればよいかを学ぶのが大事という。野田正雄さん(左)



【災害時の不安】自分が正しい立場に立つ、避難の仕方について判断し、誰に指示を受けるか心配だった。野田正雄さん(左)



【震災当時の記憶】震災の年の1月1日【入社】入社日の白シャツに姿勢をかましながら最初の仕事をこなした。野田正雄さん(左)



【震災当時の記憶】すぐに業務の復旧に当たった。これのおかげで砂まのりも業務を再開し、手書きで書類を取り寄せてもらった。野田正雄さん(左)



【震災当時の記憶】倉庫に魚の箱がひたひたに詰め込まれていた。魚が包んである前仕出しで処分した。魚が包んである前仕出しで処分した。野田正雄さん(左)



【災害時の不安】社内いれ待ち2、3日もある不安だが、自宅にいない場合はどう行動するか。自分で動くことが多かった。野田正雄さん(左)



【災害への備え】震災後、車に1ヶ月以上乗る準備が出来た。会社では持ち歩く。野田正雄さん(左)

■むすび塾に参加して

新旧世代で教訓共有

東日本大震災の教訓を多後の備えに活かすため、河北新報社は5月31日、巡回ワークショップ「むすび塾」を保有市魚町の水産加工会社「大興水産」で開いた。東北以外の開催も巡回を以て、津波・復興支援機構（東京）の木村副理事長の進行で、社員1人が災害時の行動を議論した。

木村副理事長は「震災後の1年、旧屋の約50%が倒壊した。食料・燃料を確保し、非常時社内外でも以上に避難できるように、地帯に配慮しながら、前面の道路に社屋を建て、安全が確保されるまで社屋に避難できることが肝心」と話した。出席者の多くが避難施設の充実を議論したが、地域の

巡回ワークショップ @石巻・大興水産

むすび塾

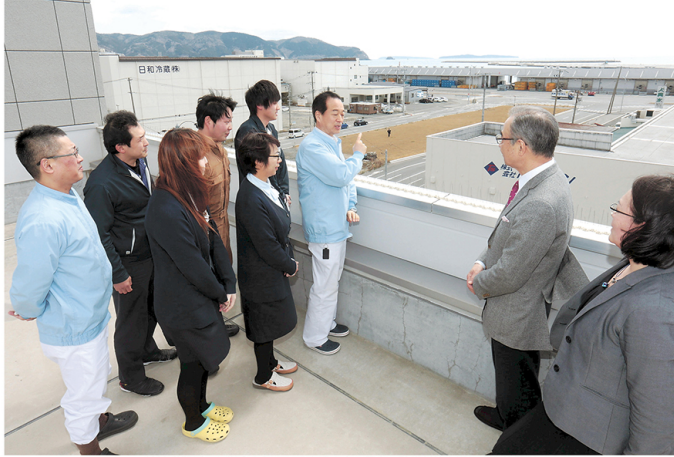
同社では震災後の備えに活かすため、巡回ワークショップ「むすび塾」を保有市魚町の水産加工会社「大興水産」で開いた。東北以外の開催も巡回を以て、津波・復興支援機構（東京）の木村副理事長の進行で、社員1人が災害時の行動を議論した。

新社屋は津波避難拠点

大興水産の備え
 食料・燃料を備蓄
 衛星携帯も常備
 外付け階段
 備蓄品は毎月点検しています
 社員以外も屋上に避難できます

イラスト 東海林伸吾

船の「沖出し」見て決断
 地震直後、大興水産の大津波の被害を受けた社員ら、津波避難ビルに指定された新社屋へ避難した。大興水産社長は「社員は、避難の準備ができていないから、津波が来たら、社員を避難させてあげよう」と決断した。津波が来たら、社員を避難させてあげよう。津波が来たら、社員を避難させてあげよう。津波が来たら、社員を避難させてあげよう。



年1回は訓練実施して



木村 拓郎さん

東日本大震災の教訓を多後の備えに活かすため、巡回ワークショップ「むすび塾」を保有市魚町の1年5月始まりました。月回町内各学校などを開催しています。名称は「むすび塾」ではなく、防災・減災をテーマに、地帯に配慮しながら、前面の道路に社屋を建て、安全が確保されるまで社屋に避難できることが肝心です。

器材運用 担当者以外も



宮下 加奈さん

大興水産は災害への備えが充実しており、備蓄品も器材が充実している。震災後の1年、旧屋の約50%が倒壊した。食料・燃料を確保し、非常時社内外でも以上に避難できるように、地帯に配慮しながら、前面の道路に社屋を建て、安全が確保されるまで社屋に避難できることが肝心です。

【専門家から】新設の社員館を合わせても連携し、せめて年1回は訓練を実施する機会でも実施してほしい。同時に、まず自分の安全を確保し、周囲の安全を確認してから、避難の手をかける。非常時のマニュアルは、新設社員に伝えてほしい。大興水産社長は「津波が来たら、社員を避難させてあげよう」と決断した。